

Rojo(1974)の dislocación temporal : 問題点とその解決にむけて

山村, ひろみ
九州大学言語文化部言語科学部門

<https://doi.org/10.15017/6796390>

出版情報 : 言語科学. 34, pp.77-94, 1999-02-27. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



Rojo(1974)の *dislocación temporal* - 問題点とその解決にむけて -

山村 ひろみ

0. はじめに

スペイン語の時制形式には以下に見られるように、ある特定の環境において、通常それに付与されている機能とは別の機能を表出するものがある。下線部は該当する時制形式を示す。

- 1) Ahora ya serán las ocho. 今はもう 8 時だろう。
- 2) Quería hablar con usted un rato. ちょっとあなたとお話したいのですが。

1)は、通常未来の事態を表出する *futuro* が発話時事態に言及した例であるが、このとき *futuro* によって表出された事態には可能性というニュアンスが加わる。一方、2)は、普通過去の事態を表出する *imperfecto* が発話時事態に言及した例であるが、ここでも当該形式によって表出された事態には *presente* によって表出された時には見られない丁寧さというニュアンスが加味される¹⁾。

Rojo(1974:111)によると、このようにある時制形式が一般に付与された機能とは別の機能を果すとき、研究者は、a)当該用法はその形式の特殊用法あるいは逸脱と見なす、b)当該用法は時制とは異なる別の範疇に属すものとして時制体系の枠組みでは扱わない、という二つの態度を取ることができるという。実際、上の例に対する従来の取り扱いもこの二つのうちのどちらか一方だったといえるだろう。しかし、Rojo はこのような態度のどちらも正しくないと主張する。その理由は、確かに当該形式は通常付与されたものとは異なる時制機能を表出してはいるが、それがある時制関係を表出し続けている点に変わりはない、従って、問題となる現象はあくまで時制体系内で説明されうると考えているからである²⁾。このような立場から Rojo は、これまで時制体系の枠組みでは扱いきれないとされてきた諸用法をその体系内の問題として処理するために、*dislocación temporal* という考えを提唱するに到った。本稿は、この Rojo の *dislocación temporal* という考えを紹介すると同時にその問題点を指摘し、それを解決するために有効と思われるいくつかの方策を提示することを目的とするものである。

以下では、まず、Rojo の *dislocación temporal* という考えの基となる Rojo(1974)の概

¹⁾ 本稿では、RAE(1973)が *presente* と呼ぶ *canto* 形は *presente*, *pretérito imperfecto* と呼ぶ *cantaba* 形は *imperfecto*, *pretérito perfecto simple* と呼ぶ *canté* 形は *pretérito*, *futuro* と呼ぶ *cantaré* 形は *futuro*, *condicional* と呼ぶ *cantaría* 形は *condicional* と記している。

²⁾ Cf. Rojo(1974), p.112.

要を述べ、その後、本題である *dislocación temporal* の解説を行なう。次に Rojo の唱える *dislocación temporal* の有効性を特に非過去事態に言及する *imperfecto* に焦点をあてながら検証する。そして、最後に、Rojo によって新たに導入された *dislocación temporal* が持つ問題点を解消しそれをより有効なものとしていくにはどのような修正・方策が必要かを検討していく。

1. Rojo(1974)

Rojo の *dislocación temporal* という新たな考えを把握するためには、何よりもその基盤をなす Rojo(1974)の理解が不可欠となるが、本節では、その中でも特に *dislocación temporal* を検討する上で必要と思われる概念のいくつかを取り出し簡単に解説していきたい。

まず、Rojo(1974)の中でもっとも重要なのは *temporalidad lingüística*(言語的時性)という概念である。これによれば、いわゆる言語が表出する時性というのは、ある起点とそれに対する方向(=時間関係)、すなわち、それより前にあるか、後にあるか、あるいはそれと同時にあるかということであり、従来の時制論が主張してきたような過去・現在・未来といった時間の三分割とは別物であるという³⁾。また、この言語的時性は様々な言語形式によって表出されるが、本稿が問題とする動詞形式の示す時制⁴⁾では、特に起点よりそれに対する前時、同時、後時という時間関係の方が重要になってくるとも述べている⁵⁾。

このような *temporalidad lingüística* という概念に基づきながら、Rojo(1974)は *presente*, *imperfecto*, *pretérito*, *futuro* という時制形式の機能を次のように規定した。

presente: OoV pretérito: O-V futuro: O+V
imperfecto: (O-V)oV

oV, -V, +V という記号はそれぞれ同時、前時、後時という時間関係を示すが、Rojo によればそれは、*imperfecto* の(O-V)oV に見られるように連鎖が可能である。しかし、どのような連鎖も遡行していくと必ずある起点と最初の時間関係を結ぶことになる。*imperfecto* の例で見れば、(O-V)で示された部分がその最初の時間関係ということになるが、Rojo はこの最初の時間関係における起点を *origen* と呼び O という記号で表している。この *origen* について、Rojo は、多くの場合は発話時と一致するが、発話時に移動するこ

³⁾ Cf. Ibid., pp. 73-84.

⁴⁾ スペイン語には英語の *time* と *tense* の違いに相当する語彙の使い分けがない。そこで、本稿では英語の *time* に相当するものには「時性」という語を、また、英語の *tense* に相当するものには「時制」という語をあてている。

⁵⁾ Cf. Ibid., p.77.

とも可能だと述べている。これらのことを踏まえて上の規定を解釈すると次のようになる。すなわち、*presente* は発話時⁶⁾ と同時関係にある事態を示し、*pretérito* は発話時よりも前の事態を示す。また *imperfecto* は発話時より前の時点と同時関係にある事態を示す。そして、*futuro* は発話時より後にある事態を示す。

以上の解釈の中で特に Rojo(1974)が従来の時制論と一線を画しているのは、*pretérito* と *imperfecto* という二つの過去時制形式に対する解釈である。これまでの研究では、*pretérito* と *imperfecto* はどちらも同じ過去時事態に言及するということから時制形式としてはひとまとめにされ、その機能的違いは時制以外の範疇、特に、アスペクトという範疇に帰するのが一般的であった。これに対して、Rojo(1974)では、この二形式の機能的差異が明らかに時制体系内の時間関係の違いとして解釈されているのが分かる。なぜなら、両形式の規定が、O-V, (O-V)oV という異なる公式によって示されているからである。

また、*presente* と *imperfecto* の機能の間に見られる平行関係も興味深い。先行研究では *imperfecto* の機能は *pretérito* との関係で言及されることはあっても、*presente* のそれとの関係で言及されることはあまりなかった。それは、発話時事態に言及する *presente* と過去時事態に言及する *imperfecto* の間に時制対立という大きな壁があったからであろう。しかし、一方で、*presente* と *imperfecto* との間に明らかな機能的類似性が存在するということは周知の事実であった⁷⁾。このように、従来の *presente* と *imperfecto* を相互に無関係のものと捉えてきた解釈では説明しにくかった事実も、Rojo の解釈によれば、それは当該形式が同じ oV という時間関係を共有することに因するという体系的説明で簡単に処理されることになる。

以上、Rojo(1974)の特筆すべき点をいくつか見てきたが、その特徴はすべて、動詞の時制形式の機能はその体系内で規定されるべきだ、という強い信念に基づくものといえるだろう。このことは次節で詳しくみる *dislocación temporal* という概念の提起によってさらに明らかになってくる。

2. *dislocación temporal* とは何か

先にも見たように、Rojo(1974)は一部の時制形式に見られる機能の転換を、その形式の

⁶⁾ Cf. Ibid., p.78. ただし、筆者は Rojo のいう *origen* の可動性について反対の立場を取っている。そのため、以下の議論では、*origen* は常に発話時として解釈されている。

⁷⁾ *presente* と *imperfecto* の間に見られる機能的類似性のもっとも分かりやすい例はいわゆる時制の一致現象である。次の例に見られるように、主動詞が過去時制の直接話法を対応する間接話法に転換すると、直接話法で *presente*(tiene)によって表出されていた従属文事態は、間接話法で *imperfecto*(tenía)によって表出されることになる。このとき直接話法の従属文中の *presente* が決して *pretérito*(tuvo)に転換されないというのは重要である。

María me dijo: "Mi padre tiene un coche muy bonito."

マリアは私に言った「私のお父さんはとても素敵な車を持っているの。」

→ María me dijo que su padre tenía/*tuvo un coche muy bonito.

特殊あるいは逸脱用法と見なしたり、その転換によって得られるニュアンスの違いに重きを置きながら時制体系とは異なる範疇で処理しようとするに反対している。それは彼が、時制形式というのは、たとえそれが通常の機能と異なるものであっても、何らかの時制関係を表出している限り、あくまで時制体系という枠組の中で処理できるものと考えているからである。Rojo(1974)で新たに提起された *dislocación temporal* という考えは、まさに上のような発想の成果ともいえるものであるが、その実際はいったいどのようなものなのか。本節ではこの問いに答えるために、Rojo が考える *dislocación temporal* の理論とその応用を見ていきたい。

まず Rojo が、時制形式の機能の転換によって得られる何らかのニュアンスの違いは、当該形式の機能が通常のそれとは異なるものに転換(移動)するということ自体に因ると考えている点を確認しておきたい。

Dicho de otro modo, existen las formas que pasan de una función a otra; este traslado lleva consigo la adquisición de un cierto contenido extratemporal que no muestra cuando es utilizada de modo acorde a su posición en el sistema. Dado que continúan expresando una cierta relación temporal, aunque diferente de la atribuida en un primer examen, no podemos concluir que estos nuevos usos niegan la temporalidad, sino que el desplazamiento en la función implica la expresión de matices no temporales añadidos. Este es el camino seguido para llegar a la idea de *dislocación* del sistema. (Rojo 1974:112)

「言い換えるならば、ある機能から別の機能へと移動する形式があるのだ。この移動に伴って何らかの時性以外の内容が獲得されるが、それは当該形式が体系内のその位置にしたがって使用される時には示されることのないものである。(しかし)それらの形式が、最初に検討された時に付与された時間関係とは異なるものの、依然何らかの時間関係を表出し続けている点を考慮するならば、我々は、これらの新しい用法は時性を否定するというのではなく、機能の移動が付加的な時間外的ニュアンスの表出を含意するのだと結論づけることができる。これが体系の転位という考えに至るために取られた道筋である。」()内は引用者の追加。

しかし、上の考えを正当化するためには、各時制形式には、そこから機能が転換(移動)していくことになる第一義的とも呼ぶことのできる基本的機能が予め付与されている必要がある。そこで、Rojo は次のように述べている。

Creo que el camino está en considerar primordiales los usos que he denominado rectos y explicar los empleos dislocados a partir de los primeros. (Ibid.)

「その道筋は、私が本来的(rectos)と名づけた用法を第一義的と考え、この第一義的用法から転位された用法を説明することにあると思う。」

Rojo が本来的用法と呼ぶのは、前節で見たような、各時制形式の機能を規定する公式に基づいたもののことである。例えば、*futuro* の本来的用法というのは、その $O+V$ という公式によって示された機能に基づいたものということになる。それでは、この本来的用法が何らかのニュアンスを加えながらそれとは異なる機能を表出するに至る過程はどのようなものなのか。Rojo はそれを、*futuro* が可能性というニュアンスを加えながら発話時事態に言及するようになる例を用いながら、次のように説明している。

Ahora bien, cuando *llegaré* (f_1) es empleada para indicar una relación temporal de simultaneidad con el origen (R_2), que supone la posesión de un rasgo $OoV(r_2)$, añade a esta significación temporal un matiz modal de probabilidad (m). Este matiz m no aparece cuando para indicar la relación R_2 se utiliza una forma que responda a una fórmula $OoV(r_2)$, esto es, *llego* (f_2). (Rojo 1974:113)

「さて、*llegaré*(=*futuro*)という形式 f_1 が特徴 OoV の所有を前提とする起点(*origen*)と同時という時間関係(R_2)を示すために用いられると、それはこの時間的解釈に可能性というモーダルなニュアンス(m)を加えることになる。このニュアンス(m)は起点と同時という時間関係(R_2)を示すために特徴 OoV に対応するような形式すなわち *llego* (=presente) という形式 f_2 が用いられる時には現れない。」(=*futuro*),(=prsepte)は引用者の追加。

Rojo は上記のことを以下の例文をあげて具体的に説明している。公式中の m は引用文にある「可能性というモーダルなニュアンス」の存在を示し、 ϕ は逆にそれが存在しないことを示す。

Serán (=futuro) dentro de un rato las diez.: ($O+V$) + ϕ

もうちょっとで 10 時だ。

Son (=presente) ahora las diez. : (OoV) + ϕ

今 10 時だ。

Serán (=futuro) ahora las diez. : (OoV) + m (Ibid.)

今 10 時だろう。

次に、Rojo はその *dislocación temporal* という考えの要ともなるべき重要な指摘をしている。

Un hecho fundamental, no considerado hasta ahora, es que la dislocación del sistema temporal no consiste en que unas o varias formas adquieran ciertos significados nuevos cuando son utilizadas en una función que corresponde a otra forma. Es todo un subconjunto de formas, definido a partir de un cierto rasgo común, el que altera su posición en el sistema en un mismo sentido y consigue de este modo la adición de un mismo significado no temporal. Utilizando de nuevo el ejemplo anterior, no se trata simplemente de lo que sucede cuando *llegaré* es empleado en una función OoV. Lo importante es que todas las formas que poseen un vector +V adquieren, al ser utilizadas en una función oV con respecto al mismo eje, un idéntico matiz de probabilidad. La comprensión de éste y otros paralelismos confirma, según creo, la idea de que estas significaciones secundarias están estrechamente ligadas a las relaciones temporales y que sólo pueden ser explicadas a partir de estas últimas. 下線は引用者。(Ibid.)

「これまで考慮されなかった基本的な事実、時制体系の転位は二、三の、あるいは数個の形式が他の形式に対応する機能において使用される時、ある種の新たな意味を獲得するといったことにあるのではないという点である。体系内の位置をある同じ方向に変更し、その結果同一の非時間的意味の付加を達成するのは、ある共通の特徴によって定義される形式全体なのである。再び前に出した例を用いるならば、問題は単に *llegaré* という形式が OoV という機能で使用された時に起こることにあるのではない。重要なのは +V というベクトルを持つすべての形式が、その同一の時間軸に対して oV という機能で用いられると、同じ可能性というニュアンスを獲得するという点なのである。思うに、このこと、また、他の相関関係を理解することは、このような二次的意味が時間関係と密接に結びついていること、そして、それはこの時間関係を通してのみ説明可能であるという考えを一層確かなものにする。」

つまり、dislocación temporal というのはその公式の中に同じベクトル記号を持つすべての時制形式に起こり、それが起こった時制形式にはすべて同じニュアンスが加味されるというのである。これは Rojo が dislocación temporal を体系的な転換と考えていることを明確に示すものである。以下は、Rojo が自説の正しさをその公式の中に +V というベクトル記号を含むすべての時制形式を用いて説明した部分である。

La dislocación del sistema temporal funciona por tanto en la forma:

$$P+V \longrightarrow (PoV) + \text{probabilidad}$$

Es decir: una forma cuya fórmula contiene un vector +V con respecto a un punto cualquiera (P) adquiere una carga significativa de “acción probable” cuando es

utilizada para designar una relación de simultaneidad con respecto al mismo punto. (Rojo 1974:115)

「時制体系の転位は従って以下のような形で機能する：

$$P+V \longrightarrow (PoV) + \text{probabilidad 「可能性」}$$

つまり、その公式が、何でもよいある時点(P)に対する+V というベクトルを含んでいる形式は、その同じ時点に対する同時関係を示すために用いられると、「可能性のある行為」という意味的機能を果すことになるのである。」

$$\begin{aligned} \text{llegaré: } O+V &\longrightarrow OoV + \text{probabilidad} \\ \text{llegaría: } (O-V)+V &\longrightarrow (O-V)oV + \text{probabilidad} \\ \text{habré llegado: } (O+V)-V &\longrightarrow (OoV)-V + \text{probabilidad} \\ \text{habría llegado: } ((O-V)+V)-V &\longrightarrow ((O-V)oV)-V + \text{probabilidad} \end{aligned}$$

上の説明で注目すべきは、+V というベクトル記号で示された部分がすべて oV に置き換えられている点である。Rojo に従えば、この+V から oV へという時間関係の転位が「可能性」という新たなニュアンスを生んだということになろう。しかし、この非常に体系的な *dislocación temporal* という考えは、はたしてスペイン語に見られるすべての時制機能の転換現象に有効なのだろうか。次節では、それを検証するために、先の例文 2) に代表されるような非過去時事態に言及した *imperfecto* を取り上げてみる。

3. 非過去時事態に言及する *imperfecto* への *dislocación temporal* の応用と問題点

スペイン語の *imperfecto* は通常過去時事態に言及するが、ある特定の文脈においては発話時事態に言及することもできる。しかも、この発話時事態に言及する *imperfecto* には *presente* にはない「非現実」というニュアンスが加味される。Rojo(1974:118)によれば、このような *imperfecto* の用法には「婉曲の *imperfecto*」, 「遊びの役割分担の *imperfecto*」, 「非現実の *imperfecto*」の三種類あるというが、本節では、特に「婉曲の *imperfecto*」を取り上げ、それに対して Rojo の *dislocación temporal* を応用するとどうなるかを検討していく。

3.1. 婉曲の *imperfecto* への *dislocación temporal* の応用と問題点

婉曲の *imperfecto* と呼ばれる用法は、以下に見られるように、*imperfecto* という通常過去時事態に言及する時制形式が用いられているにも拘わらず、それによって表出された事態は明らかに発話時事態に言及し、同時にその事態には *presente* によって表出されたときには感じられない丁寧さのニュアンスが加味されている *imperfecto* 文のことをいう。

- 3) ¿Qué deseaba usted, señora ? 奥様, 何のご用でしょうか.
- 4) Venía a pedirle un favor. ちょっとお願いがあつて伺つたのですが⁸⁾.
- 5) Algunos delincuentes, a mi juicio, debían entrar en un psiquiátrico.
私の考えでは, 犯罪者の何人かは精神科に入るべきなのですが.

まず, Rojo がこの婉曲の imperfecto も dislocación temporal という現象のひとつと考えている点を, 以下の文によって確認しておこう.

De todas formas, creo justificada la idea de una dislocación del sistema temporal en el sentido de utilizar formas cuyo valor es el de indicar anterioridad a un cierto punto para expresar la simultaneidad a él. Las matizaciones conseguidas pueden agruparse bajo el término conjunto de “irrealidad”, aunque caben en él algunas variantes. Esto es, el uso de una forma -V para expresar una relación temporal oV provoca en la acción indicada una carga de irrealidad. (Rojo 1974:117)

「とにかく, その価値がある時点に対する前時関係を示すことにある形式を, その時点に対する同時関係を表すために使うという意味において時制体系の転位という考えは正当化されていると思う. (その時)達成されるニュアンスは幾つかの違いはあるものの, 「非現実」という共通の用語でまとめることができる. すなわち, oV という時間関係を表出するために-V の形式を使用することはそれによって示された事態に非現実という役目を負わせることになるのである.」下線は引用者. ()は引用者の追加.

上の引用文に明らかなように, Rojo は発話時事態に言及する imperfecto にも dislocación temporal が適用されると考えている. また, 発話時に言及する imperfecto によって表出された事態に加えられる「非現実」というニュアンスは, その公式の中に -V というベクトル記号を含む時制形式が oV という時間関係を表出することになったために生じたものとも述べている. この説明の仕方は, futuro が「可能性」というニュアンスを加えることになる際の説明の仕方とほとんど同じといつてよく, その違いは, futuro では +V というベクトル記号が oV という時間関係を表すことになったのに対し, ここでは -V というベクトル記号が oV という時間関係を表すことになったという点だけだといつてよい. さらに, Rojo はこの -V から oV への転換が futuro のときと同様に体系的なものであることを示す

⁸⁾ この例は一見過去の事態に言及しているように思われるが, それは日本語訳の影響である. そのことは, この日本語訳の表す同じ事態が, Vengo a pedirle un favor. という presente 文によって表出される点からも明らかである. しかし, この presente によって表出された事態には 4) に感じられるような丁寧さのニュアンスがない. それゆえ, この丁寧さのニュアンスの有無こそが婉曲の imperfecto と対応する presente 文とを区別するものと考えられるのである.

ために、以下のような指摘をしている。

La forma paralela a *llego* es *llegaba*, que indica simultaneidad con respecto a una referencia anterior al origen. Cuando la situación exige la expresión de un hecho anterior a un determinado momento (...), se usa forma (O-V)-V. (Rojo 1974:119)

「*llego*(=presente)に並行した形式は *llegaba*(=imperfecto)であり、それは起点より前の参照点に対して同時関係を示す。状況がある特定の時点より前の事態の表出を要求する時には(O-V)-Vの形式(=*había llegado*)が用いられる。」()内は引用者の追加。

Llegaría pasa de una función (O-V)+V a la de (OoV)+V. Lo que se da es, pues, una dislocación consistente en sustituir un vector -V por otro oV. (Rojo 1974:121)

「*llegaría* は(O-V)+V という機能から(OoV)+V という機能に移る。それゆえ、起こっていることは、-V というベクトルを oV という他のベクトルによって入れ替えることからなる転位である。」

Toda forma con valor P+V(donde P es un punto cualquiera), utilizada para indicar una relación PoV añade a la acción expresada un matiz de probabilidad. De modo semejante, una forma P-V empleada en función PoV adquiere un matiz general de irrealidad. (Rojo 1974:128)

「P+V(P はどんな時点でもよい)という価値を持つ形式は、PoV という関係を示すために用いられるとその表出事態に可能性というニュアンスを加える。同様に、PoV という機能で用いられた P-V という形式は非現実という全般的なニュアンスを獲得する。」

上記のことを前述した *futuro* にならってまとめると、次のようになる。

P+V	→	(PoV) + probabilidad 「可能性」
P-V	→	(PoV) + irrealidad 「非現実」

しかし、ここで Rojo の *dislocación temporal* は重大な問題に直面することになる。彼の規定によれば O-V という公式で表される機能を持つ *pretérito* は、決して発話時事態に言及することがないからである。もし婉曲用法が可能性の *futuro* と同様に時間関係を示すベクトル記号の体系的転換によるものだとすると、その機能規定を示す公式の中に -V というベクトル記号を持つ *pretérito* も *imperfecto* と同じく、その -V というベクトル記号を oV に換え、非現実というニュアンスと共に発話時事態に言及することができるはずである。しかしながら、実際の *pretérito* が発話時事態に言及することはないのである。

今、このことを可能性の *futuro* と比較しながら図示してみると次のようになる。

$$\begin{array}{lll} \text{llegaré(=futuro): O+V} & \longrightarrow & \text{OoV} + \text{probabilidad「可能性」} \\ \text{llegué(=pretérito): O-V} & \times \longrightarrow & \text{OoV} + \text{irrealidad「非現実」} \\ \text{llegaba(=imperfecto): (O-V)oV} & \longrightarrow & (\text{OoV})\text{oV} = \text{OoV}^9 + \text{irrealidad「非現実」} \end{array}$$

なぜ *pretérito* では *imperfecto* のように、-V から oV への時間関係の転換が起こらないのか。このきわめて重要な問いに Rojo は何ら答えていない。それどころか、前時性から同時性という時間関係の転換を扱った部分には、*pretérito* そのものに関する言及さえないのである。おそらく、これは、例えば前に見た引用文中にある「PoV という機能で用いられた P-V という形式は非現実という全般的なニュアンスを獲得する」という語句が示すように、Rojo が実際に *dislocación temporal* を起こした時制形式のみに注目した結果に因るのだろう。しかし、それにしても、可能性の *dislocación temporal* では同じ+V というベクトル記号を持つ時制形式すべてに一律に起こった oV への転位が、非現実のそれでは必ずしも一律でなく例外もあるというのは、時制体系の整合性という観点からすれば大いに問題となあろう。

従来、婉曲の *imperfecto* についてはいわゆるアスペクト的観点からの説明が行われてきた。すなわち、同用法において *imperfecto* が用いられるのは、その未完了アスペクトによって、いったん開始された当該事態の完遂が聞き手の意向に依存しているかのように解釈されるからというのである。このようなアスペクト的観点に従うならば、*pretérito* が婉曲用法に用いられないのは、取りあえず、それが *imperfecto* とは対立する完了アスペクトを持つからという形で説明することができよう¹⁰⁾。しかし、そのようなアスペクト的解釈をここで持ち出すことはできない。なぜなら、上でも見たように、Rojo(1974)の最大の特徴は、*pretérito* と *imperfecto* の違いがアスペクトにあるのではなく、その時制機能にあると主張したことにあるからである。それでは、この問題には何の解決の糸口もないのか。本稿は、そうは考えない。そこで次節では、この問題に対して一応の解決策を提示した山村(1998b)を取り上げ、それを通して *pretérito* と *imperfecto* の機能的差異に対して再度新たな解釈を行なってみたい。

3.2. 婉曲の *imperfecto* に対する山村(1998b)による解釈

⁹⁾ Rojo(1974)は *imperfecto* の時間関係の転換について(O-V)oV から直接 OoV への転換を考えている。しかし、*futuro* の転換との平行性を考えるならば、本稿が想定するような(OoV)oV という段階を設けた上で、この(OoV)oV は実質的に OoV と等しいと述べる方が Rojo のいう時間関係の転位という考えにより忠実になると思われる。

¹⁰⁾ しかし、アスペクト的観点に基づく解釈も婉曲の *imperfecto* の実態をすべてうまく説明で

山村(1998b)は婉曲用法をめぐる *pretérito* と *imperfecto* の違いを考えるにあたり、まず、両形式の機能規定を示す公式の中に含まれる *-V* というベクトル記号の意味するところを問題にした。

pretérito: O-V

imperfecto: (O-V)oV

Rojo(1974)によれば、*pretérito*, *imperfecto* の機能規定のどちらにも同じ *-V* という前時性を示すベクトル記号が含まれている。しかし、前節で見たように、*imperfecto* において適用された *-V* から *oV* への *dislocación temporal* が *pretérito* において適用されない点からすると、この両形式の示す前時性は互いに異なる性質のものと考えざるをえない。しかし、それでは *pretérito* の前時性と *imperfecto* の前時性の間にはいったいどのような違いがあるのか。この問題について、本稿は今のところ次のように考えている¹¹⁾。つまり、*imperfecto* の前時性は基準時自体が発話時以前のどこかに定位されていることを示すもので、それは動詞の時制形式のみならず、副詞句、前置詞句などさまざまな言語形式あるいは文脈によって表されうる。一方、*pretérito* の前時性は、必ずしもすべての命題が同形式によって表出されるわけではないという事実が示すように、単なる時間軸上の定位化とは別物の、何か人間の認知のあり方と直接関わったもののように思われる¹²⁾。山村(1996a)はこの *pretérito* の前時性の特徴を「当該事態の不成立から成立への変化の表出」と規定し、その公式化のために、Rojo の *-V* に代わって *~Prop. & Prop.* という記号を新たに導入した¹³⁾。以上の考察は、結果的に、*pretérito*, *imperfecto* に対する Rojo(1974)の機能規定を、次のように書き換えることになった。

pretérito: O-V = O(*~Prop. & Prop.*)

imperfecto: (O-V)oV = Pas.oV¹⁴⁾

pretérito の公式の中にある O は発話時が基準時であることを示し、(*~Prop. & Prop.*)

きるわけではない。この点に関する詳しい議論は山村(1998b)を参照されたい。

¹¹⁾ この考えは山村(1994,1995,1996b,1997a,1998a)で行われた *pretérito*, *imperfecto* の実態観察の結果に基づくものである。

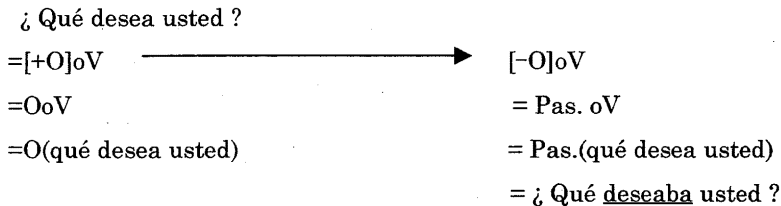
¹²⁾ どのような事態命題が *pretérito* によって表出され、どのような事態命題が *pretérito* によって表出されないかについては山村(1997a,1998a)に詳しい。

¹³⁾ 山村(1996a)で実際に提案された記号は *~Prop. → Prop.* であるが、これは後の山村(1997)において *~Prop. & Prop.* と改定された。しかし、*~Prop. → Prop.* と *~Prop. & Prop.* の意味するところはどちらも「当該事態の不成立から成立への変化の表出」で同じである。

¹⁴⁾ 山村(1994,1995,1996b,1997a,1997b,1998a)では Pas.oV の Pas. は P によって示されている。本稿では Rojo(1974)の引用部分に出現した記号 P と区別するために特別に Pas. という記号を用いている。

は、pretérito の前時性が当該事態の不成立から成立への変化を表すことを示している。他方，imperfecto の公式の中にある Pas.はその基準時自体が発話時以前にあることを示し，oV は imperfecto によって表出される事態がその過去の基準時に対して同時関係にあること，言い換えるならば，その過去の基準時に対して presente の形式で表出される関係にあることを示している。この新たな公式を見れば，pretérito の前時性は基準時(=発話時)に対する時間関係のことであり，imperfecto のそれは基準時自体が発話時以前にあることを示すということが一目瞭然であろう。

ところで，上の公式に従うならば，今問題としている婉曲用法はもっぱら基準時の転位に基づくものと解釈される。すなわち，本来 presente で表出される発話時事態は発話時を基準時としているのだが，その基準時があえて発話時以前に移されたとき，そこに丁寧さという婉曲用法に特有のニュアンスが加味されることになるのである。この過程を図示すると次のようになる。



基準時を考えるにあたり[±発話時(=O)]という素性を仮定するならば，presente の基準時は[+O]，imperfecto の基準時は[-O]ということになる。この imperfecto の基準時は presente のそれが territorio actual(現実領域)を形成するのに対し，territorio inactual(非現実領域)という仮想領域を形成すると解釈することができる¹⁵⁾。従って，山村(1998b)によれば，Rojo が発話時事態に言及する imperfecto に付与した「非現実」というニュアンスは，presente 文の基準時が話者によって故意に発話時という現実領域から発話時以前という非現実領域に移行されたことによって生じたということになる。さて，基準時が発話時以前に移ると，発話時に対して同時関係にあった事態 qué desea usted は自動的に新たに設定されたその基準時，すなわち Pas.に対して同時関係を示すことになる。その結果，presente で表出されていた事態は qué deseaba usted という imperfecto によって表出されることになるのである。以上のことからすると，婉曲用法として pretérito が出現しないのは，何よりもこの形式の基準時が発話時にあること，また，それがその基準時に対し

¹⁵⁾ imperfecto の基準時が territorio inactual という仮想領域を形成するという解釈の妥当性は，以下のような反事仮想文の帰結節に imperfecto が出現できるという事実によって依っている。

Si me encontrara con ese hombre, le decía un par de verdades que pienso sobre él.
もし私がその男にあったら，彼について私が考えている本当のところを二つ三つ話してやるのに。

て前時関係にある事態、つまり、当該事態の成立そのものを表出することの二点に因ると考えられる¹⁶⁾。

以上、婉曲用法における *pretérito* と *imperfecto* の違いが山村(1998b)でどのように処理されるかをみてきた。その結果、Rojo(1974)が-V というベクトル記号で表していた前時性は、基準時自体が発話時以前にあることを示すもの(=Pas.)と、当該事態の不成立から成立への変化を示すもの(=~Prop. & Prop.)の二種類に分類できることが分かった。そして、この二つの前時性のうち、婉曲用法の決め手となるのは基準時自体の前時性、すなわち、発話時事態に言及する *presente* 文の基準時を、話者がわざと発話時から発話時以前にずらすという操作にあることも明らかになった。これらの結果からすると、Rojo が提起した *dislocación temporal* は、彼が主張するようにベクトル記号の示す時間関係に基づくものというよりは、むしろ、基準時そのものの転位に基づくものということになる。しかし、そうすると今度は、Rojo が自説の妥当性を示すために引き合いに出した *futuro* の *dislocación temporal* はどのように説明されるのかという別の問題が生じることになってしまう。はたして婉曲の *imperfecto* と可能性の *futuro* は同じ *dislocación temporal* という枠組みで処理できるのだろうか。この点を検証するために、次節では、ここで扱った山村(1998b)の見方を基に、可能性の *futuro* を新たな観点から検討し直してみる。

4. *futuro* における *dislocación temporal* の再検討

これまでの考察からすると、婉曲の *imperfecto* における *dislocación temporal* と可能性の *futuro* のそれとは根本的に異なっているといわざるをえない。婉曲の *imperfecto* の *dislocación temporal* は基準時の転位によるものだが、可能性の *futuro* のそれは+V→oV という時間関係の転位によるものだからである。本節では、この根本的に異なる二つの *dislocación temporal* を整合性のある同じ一つの *dislocación temporal* としていくには、どのような方策を立てればよいかを検討していく。

4.1. *futuro* のもうひとつの機能 Fut.oV と *dislocación temporal*

これまでの Rojo(1974)の記述によれば、*futuro* の機能規定は O+V だけのように見える。しかし、Rojo(1974)には次のような記述もあることを見逃すべきではない。

Las tres últimas relaciones(=(OoV)oV, (O+V)oV, ((O-V)+V)oV)) carecen de formas especiales y son cubiertas en ambos modos por la correspondiente a cada una de las fórmulas sin indicación de simultaneidad, esto es:

(OoV)oV = OoV: *llego*(=presente)

¹⁶⁾ この議論からも *origen* は発話時に固定されたものと考えた方がより有効と考えられる。

$(O+V)oV = O+V: \text{llegaré}(=\text{futuro})$

$((O-V)+V)oV=(O-V)+V: \text{llegaría}(=\text{condicional})$ (Rojo 1974:94)

「最後の三つの関係 $((OoV)oV, (O+V)oV, ((O-V)+V)oV$ のことをいう)は特別の形式は欠いているが、それらは直説法と接続法の両法において、同時性の表示を欠いた公式に対応する各形式によってカバーされている。すなわち: (以下、略)」()内は引用者の追加。

この記述によれば、futuro は $O+V$ と $(O+V)oV$ の二つの異なる時制機能を表出することができるということになる。このうち、 $(O+V)oV$ という公式で示された futuro の時制機能は imperfecto の $(O-V)oV$ と平行関係にあるとあってよからう。つまり、imperfecto が発話時以前の過去時を基準時としながらそれと同時関係にある事態を表出するように、 $(O+V)oV$ という機能を担った futuro は発話時以降の未来時を基準時としながらそれと同時関係にある事態を表出すると考えられるのである。このことから futuro の $(O+V)oV$ という機能は、imperfecto のそれにならって Fut.oV と書き換えられることになる。

ところで、可能性の futuro における dislocación temporal が、Rojo のいうように $O+V$ という機能を担った futuro ではなく、Fut.oV という機能を表出した futuro において起こると考えるならば、これまでまったく異なるものと考えられてきた婉曲の imperfecto の dislocación temporal と可能性の futuro のそれは、同じ基準時の転位という枠組みで統一的に解釈されることになる。以下は、可能性の futuro における dislocación temporal が Fut.oV という機能を持つ futuro において実現すると仮定した場合の解釈を図示したものである。

Son las diez. 10 時だ。

$= [+O]oV$	→	$[-O]oV$
$= OoV$		$= \text{Fut.oV}$
$= O(\text{son las diez})$		$= \text{Fut.}(\text{son las diez})$
		$= \text{Serán las diez. 10 時だろう。}$

婉曲の imperfecto と可能性の futuro は、その基準時がどちらも発話時以外、すなわち、 $[-O]$ で示される領域にある点で共通している。しかし、imperfecto の基準時が過去という話者の判断がまったく入る余地のない非現実的なものなのに対し、可能性の futuro のそれが未来という取りあえず話者のいかなる判断も許容する可能世界であるというのは両者を大きく分つ点であり、それが各形式の表出するニュアンスの違いに反映されているのは疑いのないところであろう。

このように可能性の futuro を Fut.oV という機能を持つ futuro において実現されるものと考え、確かに前節で見た婉曲の imperfecto と可能性の futuro の根本的違いは解

消される。しかし、一方で、それでは Rojo が O+V という機能を付与した futuro はどのように解釈されるのかという問題が残る。そこで、以下では futuro の O+V という機能の再検討を行ないたい。

4.2. futuro の O+V という機能の再検討

これまでの議論から, futuro には imperfecto の Pas.oV に対応する Fut.oV という機能と Rojo が O+V という公式で示す二つの異なる機能が設定されることが明らかになったが、ここで本稿は, futuro の O+V という機能は pretérito の O(~Prop. & Prop.)という機能の発話時以降における mirror image と見なすことを提案したい。その理由は、以下のように、pretérito によって表出される事態と futuro によって表出される事態との間には明らかな平行関係があるからである。

- 6) María vivió cuatro años en Japón. (vivió = pretérito)
マリアは4年日本に住んだ。
- 7) ?María vivía cuatro años en Japón. (vivía = imperfecto)
マリアは4年日本に住んでいた。
- 8) ?María vive cuatro años en Japón. (vive = presente)
マリアは4年日本に住んでいる。
- 9) María vivirá cuatro años en Japón. (vivirá = futuro)
マリアは4年日本に住む。
- 10) María estudió inglés ayer. (estudió = pretérito)
マリアは昨日英語を勉強した。
- 11) María estudiará inglés mañana. (estudiará = futuro)
マリアは明日英語を勉強する。
- 12) María estudia inglés mañana. (estudia = presente)
マリアは明日英語を勉強する。
- 13) María vivirá en Japón el año que viene. (vivirá = futuro)
マリアは来年日本に住む。
- 14) ?María vive en Japón el año que viene. (vive = presente)
マリアは来年日本に住む。

山村(1997b)の観察によると, cuatro años(4年)のように前置詞を伴わない期間限定の副詞句は pretérito と共起することはできても、同時性という時間関係を共有する

imperfecto と presente と共起することは難しい¹⁷⁾。このことは上の 6)~8)の例でも確認される。一方, futuro とこの期間限定副詞句との共起を見ると, それは 9)の例が示すように, 何の問題もなく可能であることが分かる。このことは pretérito と futuro の機能的類似性を示唆するものと考えられる。

また, pretérito と共起する時の副詞句は 10)の例が示すように, 当該事態の成立時を表すが, 11)の例を見ると, futuro と共起する時の副詞句も同様に当該事態の成立時を表していることが分かる。ただ, この点についてはひとつ考慮すべき問題がある。それは, 12)の例が示すように, 発話時以降に生起する事態は futuro のみならず presente によっても表出可能だからである。しかし, この presente の用法は体系的なものではないように思われる。というのは 13), 14)の例が示すように, 事態命題の中には, その発話時以降の生起が futuro によってしか表出されないものがあるからである。

以上, Rojo が O+V という公式で示した futuro の機能は pretérito の機能と平行関係にあることを見てきた。このように futuro には pretérito と同じ機能を表出したものがあるのだが, それは pretérito が婉曲用法の dislocación temporal に関与しないのと同様に, 可能性の dislocación temporal には関与しないと考えられる。なお, 以後, ここで明らかになった futuro の機能規定は pretérito のそれにならって, O[(~Prop.&Prop.)]という公式によって示すことにする。この公式の中にある [] という記号は, (~Prop.&Prop.)の記号によって示される当該事態の不成立から成立への変化が, 発話時以降に起こることを表したものである。以下, 本節で問題にしてきた futuro の機能をまとめると次のようになる¹⁸⁾。なお, 比較対照のため presente, pretérito, imperfecto の機能もあわせて提示しておく。

pretérito: O(~Prop. & Prop.) presente: OoV futuro²⁾: O[(~Prop. & Prop.)]
imperfecto: Pas.oV
futuro¹⁾: Fut.oV

最後に, これまでの考察をまとめるならば, 本稿が対象とした dislocación temporal と呼ばれる現象は, 発話時事態に言及する presente 文の基準時を, 話者が何らかの意図によってわざと発話時から発話時以外の時点, すなわち Pas.や Fut.によって示される領域に転位した結果生じるものであり, それに付随するニュアンスの違いは基準時が転位され

¹⁷⁾ しかし, 次の例のように, 期間を表す数量名詞句が当該事態の付加詞ではなく項と見なされるような場合には imperfecto, presente との共起も可能である。

Maria llevaba/lleva cuatro años en Japón. (llevaba = imperfecto, lleva = presente)

マリアは日本に住んで4年になっていた/4年になる。

¹⁸⁾ futuro¹⁾, futuro²⁾というのは同一の futuro という形式が Fut.oV と O[(~Prop.&Prop.)]という異なる二つの時制機能を表出することができることを示したものである。

る方向性の違いに従ったものであると結論づけることができる。

5. まとめ

本稿で検討された内容は次のようにまとめられる。

- ・ Rojo(1974)の *dislocación temporal* という考えは、動詞の時制形式の機能はそれが何らかの時制関係を表出している限り時制体系という枠組みの中で処理されうるという強い信念に基づいたものである。
- ・ Rojo の *dislocación temporal* の定義によれば、それは、その機能の中に共通のベクトル記号によって示された時間関係を含むすべての時制形式に起こるものである。しかし、このことは彼が *dislocación temporal* の代表例としてあげた発話時に言及する可能性の *futuro* には有効であっても、同じく彼が *dislocación temporal* の一例としてあげた婉曲の *imperfecto* には十分な有効性を持たない。
- ・ Rojo の *dislocación temporal* が婉曲用法に対して有効性を持たないのは、彼の定義に従うならば、この婉曲用法は-V というベクトル記号を共有するすべての時制形式において起こるはずなのに、実際には *pretérito* のように、その機能規定の中に-V という記号を持っているにも拘わらず、婉曲用法を示すことのない時制形式があるという事実によって依っている。
- ・ Rojo の *dislocación temporal* の問題点を解決するために、本稿は山村(1998b)で提起された婉曲の *imperfecto* に対する解釈を取り上げた。その結果、Rojo(1974)が-V という記号で表した前時性には、*imperfecto* のそれのように基準時が発話時以前にあることを示すものと、*pretérito* のそれのように当該事態の不成立から成立への変化を示すものの二種類あること、そして、*pretérito* が婉曲用法として用いられないのは、この用法がもつばら *imperfecto* の持つ基準時自体の前時性に基づくものであるからという二点が明らかにされた。このうち、後者の点は *dislocación temporal* という現象が、*presente* 文の基準時が発話時から非発話時時点へ転位された結果生じるものであることを明示したものと見える。
- ・ 山村(1998b)の婉曲の *imperfecto* の解釈は、可能性の *futuro* における *dislocación temporal* の解釈に変更を加えることになった。Rojo によれば、可能性の *futuro* という現象は、*futuro* の O+V という機能の一部である+V というベクトル記号が oV に転位することによって生じたものであるが、本稿はこの Rojo の解釈とは別に、可能性の *futuro* は、同形式の Fut.oV という時制機能に基づく現象であるという新たな解釈を提起したのである。この解釈の利点は、婉曲の *imperfecto* と可能性の *futuro* が同じ、*presente* の基準時が発話時から発話時以外の時点に転位された結果生じた現象として統一的に説明されることにある。

- ・最後に, Rojo が futuro に付与した O+V という機能は, pretérito の(~Prop.& Prop.) という機能の発話時以降における mirror image に他ならないことが示された.

参考文献

- Real Academia Española[RAE] (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa-Calpe.
- Rojo, G. (1974): 《La temporalidad verbal en español》, *Verba* 1, pp.68-149, Santiago de Compostela: Universidad de Santiago de Compostela.
- 山村 ひろみ(1994): 「複文内の indefinido と imperfecto ー過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察」 *HISPANICA* 38(日本イスパニヤ学会), pp.121-135.
- (1995): 「複文内の indefinido と imperfecto ー過去の主動詞に従属した関係節における実態とその考察」 *HISPANICA* 39(日本イスパニヤ学会), pp.145-158.
- (1996a): 「canté と事行の時間構造」『独仏文学研究』第 46 号(九州大学独仏文学研究会), pp.113-133.
- (1996b): 「canté/cantaba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」 *HISPANICA* 40(日本イスパニヤ学会), pp.48-62.
- (1997a): 「ser コピュラ文の pretérito による表出について」『独仏文学研究』第 47 号(九州大学独仏文学研究会), pp.81-102.
- (1997b): 「canté 形, cantaba 形と時間的限定性」 *HISPANICA* 41(日本イスパニヤ学会), pp.53-66.
- (1998a): 「pretérito による表出のための条件ー無生主語文の場合」『言語文化論究』No.9(九州大学言語文化部), pp.185-207.
- (1998b): 「imperfecto de cortesía y modestia について」 *HISPANICA* 42(日本イスパニヤ学会), pp.24-35.